

令和 6 年 5 月 7 日現在

機関番号：24506

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K04852

研究課題名（和文）ベルリンの壁跡地の空間利用と21世紀のオープンスペース整備論に関する研究

研究課題名（英文）A Study on the Space Utilization of the Former Berlin Wall Site and the Theory of Open Space Development in the 21st Century

研究代表者

太田 尚孝 (Ota, Naotaka)

兵庫県立大学・環境人間学部・教授

研究者番号：30650262

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、ベルリンの壁跡地利用を誰がどのような考え方と手法で進め、成果・課題は何かを明らかにし、オープンスペース整備論を考究することを目的とした。コロナ禍による1年の延長も含めた4か年の研究成果では、最初から大きな計画があり個別事業が行われたわけではないこと、開発圧力の高い点的整備では長期及び多層的で法定・非法定の合意形成プロセスを経て整備方針が決まったものの事業化は見通せないこと、広域的で線的整備ではレクリエーションや生態系保全などの別の用途が入り込むことで整備や維持管理が容易になったといえること、があげられる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の研究成果の学術的意義や社会的意義については、悲劇の遺産とも新たな時代を開いた象徴とも、都市の中の貴重なオープンスペースともいえ、かつ世界的に注目度が高いベルリンの壁跡地の土地利用の現状が明らかになったことである。学術的にはこれまでは壁の崩壊が所与の条件として、ほとんど調査されていなかったことを考えると、跡地自体に注目した意義は大きいと言える。社会的には、ドイツと日本との計画文化的違いは計画制度と共にあるとしても、点的であっても線的であっても、様々な歴史遺産をどのように解釈し整備保全していくかの具体例の提示となると考えられる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to clarify who and what ideas and methods were used to utilize the former site of the Berlin Wall, what were the results and issues, and to consider the theory of open space development. The results of the four-year study, including a one-year extension due to the Corona pandemic, showed that (1) no major plans and individual projects were made from the beginning, (2) although the development policy was decided through a long-term, multi-layered, statutory and non-statutory consensus building process at Checkpoint Charlie, where development pressure was high, the realization of the policy was not foreseeable, (3) in the wide-area "Mauer Weg" and "Berlin Green Belt Concept," the development and maintenance of the area was facilitated by the inclusion of other uses, such as recreation and ecosystem preservation.

研究分野：都市計画

キーワード：ドイツ ベルリンの壁 オープンスペース グリーンベルト ダークツーリズム 合意形成

## 1. 研究開始当初の背景

わが国を含めて世界的に大都市では、グローバル社会での大都市への富へのさらなる集中化と人々の流動性の高まりなどから、再都市化現象とも呼ばれる大都市への再集中化がみられる。この際に、市場やコミュニティの力を活用しつつも、SDGs の観点からも過密やジェントリフィケーションなどの外部不経済性をいかに緩和させ、都市全体・生活圏レベルで人間中心の持続可能な都市発展に導くかが問われている。この文脈の中で、住宅や建築物以外のオープンスペースが都市の中で果たす役割はきわめて大きい。これはヤンゲールの『人間の街：公共空間のデザイン』や榎文彦らの『アナザーユートピア：「オープンスペース」から都市を考える』といった近年の都市空間整備論でも議論の中心に置かれている。つまり、余白とも思われる都市空間をマクロ・ミクロでその空間利用を定義し、多主体連携で創造的に整備・維持管理をし、都市の質的魅力を高めていくかは世界共通の挑戦的課題といえる。そこで本研究は、この問いを1989年のベルリンの壁崩壊後から現在、未来に続くベルリンの跡地利用を具体例として調査研究を行うことで解き明かすことを試みた。

## 2. 研究の目的

本研究は、21世紀のオープンスペース整備を巡る共通の課題である「空間の定義と整備手法」「空間の維持管理と主体間連携」「空間の多様性と包摂」が世界的にみても最も先鋭化し、その空間活用のあり方が最も問われたと思われるベルリンの壁跡地に注目する。研究の目的は、ベルリンの壁跡地利用を誰がどのような考え方と手法で進め、結果としての空間変容と成果・課題は何かを明らかにし、オープンスペース整備論を批判的に考究することである。

## 3. 研究の方法

研究代表者と同じくベルリンでの研究実績を有する研究分担者1名と4か年(コロナ禍により当初の計画より1年間の延長あり)で、①再統一後のベルリン都市空間整備戦略とベルリンの壁跡地の位置づけの変遷分析、②空間利用類型ごとの整備計画や主体間連携の仕組み、利用実態に関わる事例分析、③上記2点からわが国を含めた今後の世界的なオープンスペース整備論への批判的考察、の3つの研究課題に取り組んだ。具体的な研究の方法は、文献調査、現地調査、ヒアリング調査などを組み合わせた。なお、ドイツへの渡航が困難な時期もあり、実際に現地調査を行ったのは、点的な事例としてグライスドライエック公園及びチェックポイント・チャーリー、線の・広域的な事例としては「壁の道」及び「ベルリン・グリーンベルト構想」となった。

## 4. 研究成果

(1) ベルリンの跡地整備に関わる全体構想(太田・新保, 2022)(太田・新保, 2024)

存在意義がなくなったベルリンの壁をベルリンやドイツの中でどのように定義づけるかという議論は、壁の崩壊直後は、これまで東西ベルリンを分断していた壁はその存在意義がなくなった時点で完全に撤去されるべきという考え方と、人類の歴史の証人として残すべきという考え方に大別された。この中で、特に壁の崩壊直後は市民感情や政治世界は前者を強く支持した。だが、2000年代に入ると、壁の崩壊に対する市民感情に変化がみえ、東西ドイツ時代を冷静に解釈することへの心理的準備ができ、他方でその象徴としてのベルリンの壁の多くが既に撤去されていることに疑問が向けられた。全体的な再整備計画としては、『ベルリンの壁への記憶のための全体構想：記録化、情報提供、追憶(以下、『全体構想』)』がベルリン市主導で2006年に策定され、本研究で扱った個々の事例でもこの構想が一定程度の影響力をもっている。同構想では、中長期的観点からの整備方針や予算付け、空間的メリハリや機能分担などが示された。すなわち、時間軸で考えると、『全体構想』が策定され、それに応じて個々の場所で保存活動が行われたわけでは決してなく、むしろ個々の場所での15年の試みがオーソライズされた形で『全体構想』に至ったといえる。もっとも『全体構想』の「行動分野」「ファイナンス」をみると、既存のベルナウアー通りのベルリンの壁を紹介する関連施設の拡張が核であり、投資額は全体の82%と著しく高かった。

(2) 点的・狭域的な事例調査：グライスドライエック公園、チェックポイント・チャーリー(太田・新保, 2021)(太田・新保, 2022)

グライスドライエック公園は、直接的にはベルリンの壁の跡地とはいえないものの、ベルリンの壁によって遮断された鉄道用地の上に設置されたベルリン市が管理する大規模公園である。同公園の調査は管理主体へのヒアリング調査、現地調査、文献調査に基づいて行った。結果として、再統一後のベルリンでは、1)段階的に市立公園の量的・質的充実化が実施されたこと、2)グライスドライエック公園では、継続的な市民参加と公共セクターとの協働により従前の土地利用を活かし、かつ多世代型・多目的型の公園が実現化したこと、3)ベルリンでは市立公園の整備や管理運営は公共主導と理解できるが、背景や考え方は必ずしも本調査では明らかになっていないことが、明らかになった。

チェックポイント・チャーリーは、国際的に最も有名なかつての東西ドイツの国境検問所といえる場所であることから、調査対象地とした。壁の崩壊後の計画プロセスと合意形成に関する包括的な文献調査により、1) 他の都心開発事業と同様に、チェックポイント・チャーリーは、市民参加が集中的に行われていること、2) チェックポイント・チャーリーでは、壁の崩壊から30年以上経過した今でも具体的な整備事業が実現化していないこと、3) チェックポイント・チャーリーは、ベルリンの歴史性の解釈の難しさと計画実現の不確実性を反映していること、4) 法定の都市計画は、公共性の担保と合意形成の促進には役立っていること、が明らかになった。

(3) 線的・広域的な事例調査: 「壁の道」, 「ベルリン・グリーンベルト構想」(太田・新保, 2024)

ベルリンの壁跡地の線的・広域的な整備事例として、歩行者・自転車道の「壁の道」がある。同プロジェクトの直接的起点は、2001年のベルリン市議会の決議であり、歩行者及び自転車利用者のためのネットワーク構築を総延長160kmとしてかつての西ベルリンの国境線沿いに、部分的には残存する国境施設の利用も含めて整備することが決定された。加えて、かつての国境関連施設であるこの軌跡を特徴づけ、追体験可能にするように、また部分的に既にあったベルリンの壁での死者を悼むための短い履歴を記した情報版が、「壁の道」に情報版や看板として体系的に設置されることが強化された。この「壁の道」を含んだ都心から北部郊外の一部は、「グリーンベルト」と呼ばれ、帯状の緑地帯として生物多様性や種の保全から保護地域となっている。これは、「鉄のカーテン」と呼ばれた欧州レベルの東西分断線を緑のネットワークで結ぶ構想の「欧州グリーンベルト」のベルリン版として、ベルリンの壁跡地を緑地帯として保護するプロジェクトである。長さは15kmに達し、多くが都市鉄道(S-Bahn)沿いにある。

これらを対象とした現地調査、文献調査から、1) 機能を変えてでもベルリンの壁を維持したことは評価に値できること、2) 今後の持続可能性にはさらなる計画的枠組みが必要といえ、特に土地利用計画とコスト管理は重要であること、が明らかになった。

#### (4) 結論

本研究は、ベルリンの壁跡地利用を誰がどのような考え方と手法で進め、成果・課題は何かを明らかにし、オープンスペース整備論を考究することを目的とした。コロナ禍による1年の延長も含めた4か年の全体の研究成果では、1) 最初から大きな計画があり個別事業が行われたわけではないこと、2) 開発圧力の高い点的整備では長期及び多層的で法定・非法定の合意形成プロセスを経て整備方針が決まったものの事業化は見通せないものもあること、3) 広域的で線的整備ではレクリエーションや生態系保全などの別の用途が入り込むことで整備や維持管理が容易になったといえること、があげられる。以上の結果から現代都市社会のオープンスペースのあり方を考えると、現代都市の一つの特徴が利害関心の多様さとすれば、いかなる整備・開発・保全を行うにしても、枠組みとしての計画行為は必要であるといえる。特に広域の場合は、土地利用計画やコスト管理に関わる計画は根幹的存在といえる。もっとも、この際に歴史的遺産が空間の背景にあるとすれば、計画目標や計画内容の絶対的正解はなく、むしろ合意形成の工夫と説明責任が強く問われる。また、空間の解釈は時代と共に変化するとすれば、可変性を担保しておくことも必要であろう。それでもなお、ベルリンの壁の跡地の利活用の計画と実践からみえることは、構想から計画、事業といった一元的発想が通用せず、実態は相互が密接に関連し、動的な動きをみせている。すなわち、ベルリンでは試行錯誤の中からより良い解決策を見出したといえるが、壁崩壊後の面的撤去が『全体構想』にも個別にも大きな影響を与えたことは事実であろう。

本研究の研究成果の学術的意義や社会的意義については、悲劇の遺産とも新たな時代を開いた象徴とも、都市の中の貴重なオープンスペースともいえ、かつ世界的に注目度が高いベルリンの壁跡地の土地利用の現状が部分的であっても明らかになったことである。学術的にはこれまでは壁の崩壊が所与の条件として、ほとんど調査されていなかったことを考えると、跡地自体に注目した意義は大きいと言える。社会的には、ドイツと日本との計画文化的違いが計画制度と共にあるとしても、点的であっても線的であっても、様々な歴史遺産をどのように解釈し整備保全していくかの具体例の提示となると考えられる。もっとも、申請書執筆当初に計画していた現地でのアクティビティ調査や地域社会側の受容調査は実施できなかったため、今後の研究課題といえる。

<参考文献(主な研究成果)> 本研究の成果は学術論文に加えて国際的セミナーでも発表有

- 太田尚孝・新保奈穂美(2024)「ベルリンの壁跡地の広域的利活用と持続可能性: 「壁の道」及び「グリーンベルト」を事例に」兵庫県立大学環境人間学部研究報告, 26, 15-24 査読有
- 太田尚孝・新保奈穂美(2022)「ベルリンの壁跡地を巡る利活用の実態と課題に関する基礎的調査: 壁崩壊後のチェックポイント・チャーリーの再整備に向けた計画プロセスと合意形成に注目して」都市計画論文集, 57(2), 364-374 査読有
- 太田尚孝・新保奈穂美(2021)「再統一後のベルリン都心部における大規模市立公園の整備及び管理運営の方針と実態に関する調査報告: ベルリン市の政策の潮流理解とグライズドライエック公園の事例調査を基に」都市計画論文集 56(1), 54-62 査読有

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 4件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 太田尚孝・新保奈穂美	4. 巻 20
2. 論文標題 ベルリン市の治安維持を目的としたパークマネージャーの試験的導入と全市的展開	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 都市計画報告集	6. 最初と最後の頁 180-185
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11361/reportscpij.20.2_180	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 太田 尚孝, 新保 奈穂美	4. 巻 56(1)
2. 論文標題 再統一後のベルリン都心部における大規模市立公園の整備及び管理運営の方針と実態に関する調査報告	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 都市計画論文集	6. 最初と最後の頁 54-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11361/journalcpj.56.54	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 新保 奈穂美, 太田 尚孝	4. 巻 55(3)
2. 論文標題 ドイツ・ベルリン市における社会都市プログラムを通じたコミュニティガーデンへの行政支援	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 都市計画論文集	6. 最初と最後の頁 799-805
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11361/journalcpj.55.799	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 太田尚孝・新保奈穂美	4. 巻 57(2)
2. 論文標題 ベルリンの壁跡地を巡る利活用の実態と課題に関する基礎的研究：壁崩壊後のチェックポイント・チャーリーの再整備に向けた計画プロセスと合意形成に注目して	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 都市計画論文集	6. 最初と最後の頁 364-374
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11361/journalcpj.57.364	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 太田尚孝・新保奈穂美	4. 巻 26
2. 論文標題 ベルリンの壁跡地の広域的利活用と持続可能性：「壁の道」及び「グリーンベルト」を事例に	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 兵庫県立大学環境人間学部研究報告	6. 最初と最後の頁 15-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 新保 奈穂美, 太田 尚孝
2. 発表標題 ドイツ・ベルリン市における社会都市プログラムを通じたコミュニティガーデンへの行政支援
3. 学会等名 日本都市計画学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 新保奈穂美
2. 発表標題 負の遺産を未来への礎に：ベルリンの壁跡地を活かした緑空間
3. 学会等名 ランドスケープの新潮流セミナー 地域経営とランドスケープ
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 Naomi Shimpō
2. 発表標題 Using of vacant land for urban gardening towards a sustainable future - Case studies from Berlin and Kobe
3. 学会等名 DAFNAE Seminars
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担 者	新保 奈穂美  (Shimpo Naomi)  (40778354)	兵庫県立大学・緑環境景観マネジメント研究科・講師    (24506)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------